

宮崎大学における中国語教育の課題

—中国語検定結果を通して—

上原 徳子ⁱ 三好慎一郎ⁱⁱ

The problems of Chinese education in The University of Miyazaki
—Based on the results of Test of Chinese Proficiency—

Noriko UEHARA Shinichiro MIYOSHI

要旨

本論文は、宮崎大学における中国語教育の問題点を、中国語検定の結果を通して考察したものである。なお、平成19年度及び20年度実施の検定試験を分析の対象とする。それに加えて平成20年度の選択中国語 ・ （中級中国語科目）内で実施したアンケート結果及び平成20年11月の中国語検定実施直後に行ったアンケート調査も対象とした。検定の結果からは、本学学生の中国語力の問題点が、リスニング力と語彙力の不足にあることがわかった。また、アンケートの結果、本学選択中国語 ・ 履修学生がほとんど予習復習の時間を持っていないこと、また検定試験に向けての学習時間も極めて少ないことがわかった。このような学生の学習状況は、中国語検定の結果に明確に反映されている。したがって、今後の本学中国語教育は、そのような学生に対応した学習モデルを構築する必要があると考えられる。

はじめに

宮崎大学中国語講座は、学生が1年ないし2年の学習の成果を明確な形で得ることによる学習意欲の向上をねらい、平成19年度より中国語履修者に対して中国語検定受験を積極的に推奨してきた。我々がこのような方針を示し様々な試みを始めて2年が経過した今、検証が必要ではないかと考えたのが本論文執筆の動機である。

本論文は、まず本学学生の中国語検定受験結果を振り返り、次に中級中国語授業中でのアンケートと授業中の取り組みを検証し、更に検定直後に受験学生に行ったアンケートを踏まえ、本学中国語教育の問題点について考察、そして問題の改善方法を提案する。

なお執筆に当たっては、中級学習者向けの選択教養科目「選択中国語 ・ 」を担当している本学非常勤講師三好慎一郎氏の協力をいただいた。なお、三好氏の担当は3章部分である。

1 本学中国語教育の変遷

1.1 初修外国語中国語の開講から今日まで

本学の教育は、大きく共通教育と専門教育に分かれている。毎年度の新入生に配布される『キャンパスガイド』によれば、初修外国語は「英語以外の外国語を履修することにより、言語の多様性や共通性などの言語感覚を養い、言語が様々な文化の媒体であり、また文化そのものでもあることの理解を目標とする科目ⁱⁱⁱ」と位置づけられている。

ここでいう初修外国語とは本学の大学教育基礎科目の一つである。学生は1年次に2科目4単位の取得（ただし医学部看護学科は1年次に1科目2単位）をしなければならない。教育文化学部、農学部、工学部において、これらは通年科目であり、学生は90分×30回×週2回の授業を前後期を通じて受講する。なお、現在初修外国語は、医学部医学科・看護学科共に半期の科目である（半期・週2回で2単位。看護学科の学生は、前期のみ履修して2単位を修得する）。

学生が2年次以降に受講できる中国語中級科目としては、選択教養科目として開講されている選択中国語（前期）および（後期）（各2単位）がある。なお、平成20年度までは、教育文化学部地域文化課程の専門科目として2年次後期に中国語コミュニケーション（2単位）があった。しかし、この科目は改組に伴い、今年度は開講されていない。関連する科目として、異文化交流体験学習がある。これは、共通教育の中の選択教養科目であり、参加してレポート等の課題を提出すると2単位が取得できる。教員の引率の元、韓国やニュージーランド、中国の大学に1週間から10日程訪問し、文化交流を行う。ここ2年間は、国際連携センターの協力のもと中国語講座が全日程の企画をし、毎年3月に12日間の語学研修を南京農業大学で行っている。平成19年度は19名、平成20年度は15名の学生が参加した^{iv}。今年度も実施が決定している。

中国語は、初修外国語の一つとして平成14年4月に初めて開講された。（それまでは、ドイツ語・フランス語の2言語のみが開講されていた。）14年度および15年度の中国語は、教育文化学部・農学部・工学部各1クラスずつ開講されていたが、16年度以降は、各学部2クラス開講されている。医学部での開講状況についても簡単に述べておきたい。平成15年10月に宮崎大学と宮崎医科大学が合併したのにもとない、平成16年度からは共通教育も共に行うことになった。そのため、平成16年度からの2年間は、初修外国語はドイツ語・フランス語・中国語がそれぞれ医学部のクラスを設けて清武キャンパスで開講されていた。しかし、諸般の理由により平成18年度よりドイツ語以外の語学については、強く履修を希望する学生のみ木花キャンパスで行われている各言語の授業に参加する形となった。この状況が現在でも続いている。なお、平成14年度の中国語開講時には本学専任の中国語教員（日本人）は1名であったが、19年度より日本人1名が増え専任教員2名の体制をとっている。

1クラスの人数は、以下のような事情で決まっている。毎年各新入生の希望を取った上、初修外国語全クラスがほぼ同じ人数になるように調整を行う。たとえば、平成21年度は、教育文化学部、農学部、工学部の新入生の合計が約900人であった（前述のとおり、医学部は、清武キャンパスでドイツ語を履修する学生がほとんどであるので、ここでは人数に含まない）。その人数を基に、新入生全体の人数を全クラス数がおおよそ均等な人数になるように調整する。（選択言語については、なるべく学生の希望に添うように考慮している。言語間に大幅な希望人数の偏りがある場合だけ、やむを得ず公正な手段により、一部学生に第2希望以下の言語を履修してもらうことになっている。）中国語の場合、19年度までは、農学部・工学部で1クラ

スが55名程度、教育文化学部では医学部学生も含めて1クラス50名程度であった。しかし、21年度に韓国語が新たに開講されたため、1クラスの人数は5名から10名程減少した。ただし、実際は編入学生と過年度受講生（単位未習得による再受講、または選択言語を1年次とは変更した学生）がいるため、1クラスの人数は、単純に全新生をクラス数で割った平均よりも増加する。平成21年度は最終的に、農学部・工学部が1クラス60名程度、教育文化学部が45名程度となった。

授業は、開講時から一貫して週2回の授業の内一回を日本人専任教員が、もう一回を中国人非常勤教員が行う形式をとっている^{vi}。当初はそれぞれが独自に教科書を指定し、同時並行的な授業を行っていたが、平成20年度から共通の教科書を使用することとし、日本人専任教員が主に文法を、中国人非常勤教員が主にリスニングと口語を担当する形を取っている。

1.2 宮崎大学での中国語検定実施

本学は、平成19年6月実施の中国語検定から委託会場として検定試験を実施している。委託会場とは、一つの団体（学校・企業・専門学校等）で受験者が10名以上ある場合、1級2次試験を除き、自らの施設内で中国語検定試験を実施することができるというものである。委託会場の責任者は全ての受験申込書を取りまとめ、中国語検定協会に申込期間内に送付する。試験は公開会場と同様、同一日時に一斉に行わなければならない^{vii}。

2 本学学生の中国語検定受験結果について

これまで述べてきたように、中国語検定試験受験を中国語講座で推奨し、中国語検定協会に委託会場として申し込み、学生の宮崎大学での受験を可能にしたのは、平成19年からである。従って、現在、2年間6回分のデータがある。それでは、まずこの2年間の中国語受験者数の推移と合格者数について検討したい。

2.1 平成19年度及び20年度の中国語検定受験者及び合格者数

次に挙げる表は、平成19年度及び20年度の中国語検定受験者及び合格者数をまとめたものである。なお、これらのデータは中国語の授業および学内の掲示を通して受験を案内し、中国語講座が期間内に受験を受け付けした学生のものに限られており、個人的に大学生協及び書店を通して申し込んだ者については、把握していない。

表1ののべ受験者数をみると、本学の中国語検定受験者は、11月が最も多い。これは、1年生が11月時に準4級を受験するためである。中国語では、中国語検定に合格した場合、1科目にのみ成績に5点を加点することになっている。また、不合格であっても、合格基準点から5点以内であれば2点を加点している。受験者が多いことは、おそらくこの措置が功を奏しているためと推測される。これについては、第4章でも触れる。だが、要因はそれだけでなく、授業中に各教員が練習問題をさせたり、受験の重要性について説いたことも大きな役割を果たしたと考えられる。次に各級の状況をみていきたい。

(表 1)

	受験者数 (志願者数)					合格者数					のべ受験者数
	準 4 級	4 級	3 級	2 級	準 1 級	準 4 級	4 級	3 級	2 級	準 1 級	
第62回 H19.06	8 (9)	9 (9)	2 (2)	1 (1)	-	7	6	0	0	-	20
第63回 H19.11	98 (107)	10 (10)	1 (1)	2 (2)	2	73	2	0	1	1	113
第64回 H20.03	5 (5)	33 (34)	6 (6)	1 (1)	-	5	10	0	0	-	45
第65回 H20.06	40 (45)	28 (30)	4 (4)	-	-	15	6	1	-	-	72
第66回 H20.11	65 (69)	18 (20)	9 (9)	-	1 (1)	56	5	1	-	1	94
第67回 H21.03	-	5 (6)	7 (7)	-	-	-	1	0	-	-	12

2.1.1 準4級受験者について

前述のとおり、準4級は本学では受験する学生が最も多く、その受験者は第62回を除けば、全員が1年生である。その合格率及び平均点を以下の表にまとめた。なお第62回は1年生の受験者がいなかったため、対象から外し、第63回から66回（第67回は受験者無し）までの結果をみていきたい。

準4級の認定基準は、「学習を進めていく上での基礎的知識を身につけていること。（学習時間60～120時間。一般大学の第二外国語における第一年度前期修了，高等学校における第一年度通年履修，中国語専門学校・講習会等において半年以上の学習程度。）基本単語約500語（簡体字を正しく書けること），ピンイン（表音ローマ字）の読み方と綴り方，単文の基本文型，簡単な日常挨拶語約50～80。^{viii}」とされている。

(表2-1) 合格率 [%]

	宮崎大学	全国
第 63 回	74.5	71.4
第 64 回	100	66.6
第 65 回	37.5	64.1
第 66 回	86.2	76.8

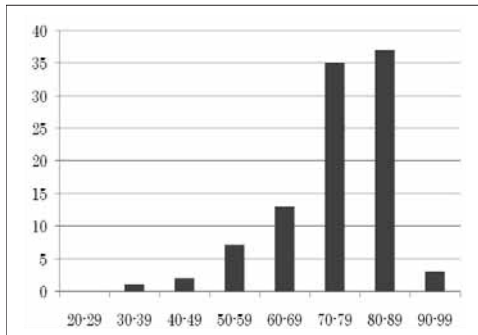
(表2-2) 平均点

	宮崎大学	全国
第 63 回	74.7	54.3
第 64 回	65.6	65.3
第 65 回	52.2	65.0
第 66 回	72.7	71.3

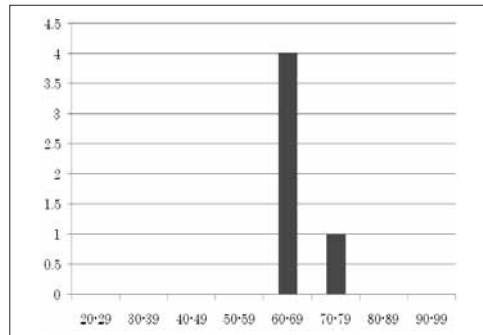
はじめに、合格率をみると、本学は、第65回を除けば全国平均以上の成績を上げている。第64回の合格率が100%なのは、3月受験であるため十分な力を備えた学生のみが受験したためと思われる。やはり、準4級受験は、1年生の11月か3月が適しているといえるだろう。第65回は6月実施であり、中国語学習歴が3ヶ月の1年生が受験しているためこのような低い成績となった。この結果は、第66回の受験者数減少の呼び水となってしまった。すなわち、6月の

試験に参加した中国語学習に対して比較的積極的姿勢を持った学生がすっかり自信をなくしてしまったのである。このときは、あきらめムードが学生の間にあったと聞いており、教員側が大いに反省することとなった。この教訓を踏まえ、21年度1年生に対しては積極的に6月の受験を勧めない方向で指導した。

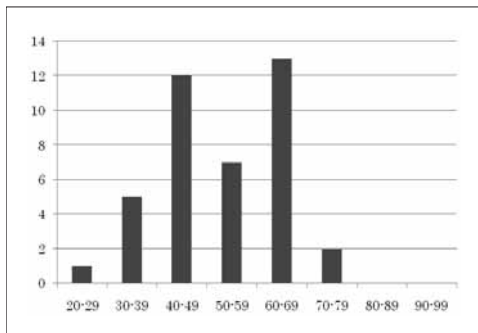
(表3-1) 第63回



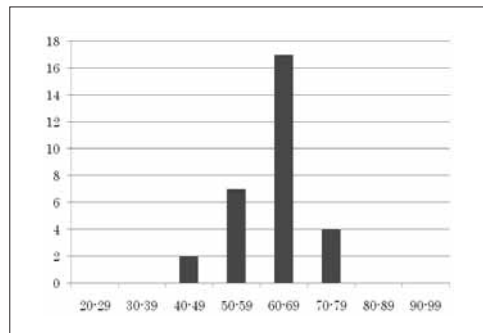
(表3-2) 第64回



(表3-3) 第65回



(表3-4) 第66回



次に、受験者の得点の分布をみていきたい。上に挙げた表3-1から3-4は縦軸が人数、横軸が得点を表している。

第65回(表3-3)は、再三述べているように学習歴が3ヶ月未満の1年生が受験したため、成績が60点以下に偏っている。第63回(表3-1)および第66回(表3-4)はどちらも11月の検定で、学習歴6ヶ月程の1年生が参加している。第63回は70点から89点までの層が、第66回は60点から69点の層が最も厚かった。これは全国の実験者の傾向と著しく相違があるわけではない。しかし、第63回と66回は、同じ11月の受験だったのにも関わらず平均点は第63回の方が全国平均と比べても高く、得点分布にも差がある。この原因はどう考えるべきであろうか。

原因の一つとしては、この年から教科書を2科目(週2回の授業)を通じて1冊のみ採用し、日本人教員が各課の文法部分を教え中国人教員が会話部分を教える役割分担の形を取ったため、各教員がお互いの進捗を合わせることに精一杯となり、時間を自由に活用して独自の指導法を実践することができなくなったことの影響が考えられる。つまり、平成19年度までは各教員が

1冊の教科書を自分の好きな進度で教えていたため、中国語検定前に時間をとって、じっくり検定対策を行うことができたが、20年度はそれができなかったのである。ただし、合格率を比較すると20年度の方が高い。これは、この1冊の教科書を使用することで学生の負担を軽減する方法が成功した側面といえよう。

また、1年生の検定への準備不足を補うために、中国語講座では火曜と木曜の昼休みに補習を行ったのだがその効果があまりなかった。この補習の効果がなぜみられなかったのかについては、第4章でアンケートの分析を通して考察したい。

準4級受験者については、以下のようにまとめることができるだろう。中国語検定試験は、成績への加点措置や、授業中の呼びかけによって履修者の3分の1ほどが受験をすることにより、各学生が目標を持って学習するきっかけになっている。しかし、本学の平均点は、全国平均よりわずかに上回る程度であり、さらに合格者の得点分布を見ると成績はほぼ60点台に集中している。1年の11月までの学習内容では、これが限界とも考えられるが、この傾向は4級と3級の現状とも密接に関連があるといえるだろう。

次に4級以上の受験者の状況についてみていきたい。

2.1.2 4級以上受験者について

中国語検定4級以上は、リスニングと筆記部分、それぞれの合格基準点を満たさなければ合格とはならない。受験者にはバランスの取れた学習が求められる。

4級の認定基準は、「平易な中国語を聞き、話すことができること。(学習時間120～200時間。一般大学の第二外国語における第一年度履修程度。)単語の意味、漢字のピンイン(表音ローマ字)への表記がえ、ピンインの漢字への表記がえ、常用語500～1,000による中国語単文の日本語訳と日本語の中国語訳。」とされている。また、3級の認定基準は、「基本的な文章を読み、書くことができること。簡単な日常会話ができること。(学習時間200～300時間。一般大学の第二外国語における第二年度履修程度。)単語の意味、漢字のピンイン(表音ローマ字)への表記がえ、ピンインの漢字への表記がえ、常用語1,000～2,000による中国語複文の日本語訳と日本語の中国語訳。」とされている。

本学学生にとっては、1年生の3月か2年生の6月に4級を受験し、2年生の11月か3月に3級を受験して合格するのが理想的である。それを念頭に置き、2年次以降に履修できる選択中国語・は前期の が4級を後期の が3級を目指すことを前提にした内容となっている。また、学生には毎年3月に行われる異文化交流体験学習に参加し、現地でリスニング力を鍛えた上での3月受験も奨励している。

次に挙げる表が、本学の4級および3級受験者の平均点である。2級以上は受験者がきわめて少ない上、留学経験者など特殊な事情を持つ学生の受験であるため、今回は分析の対象としない。

表4からはっきり読み取れるのは、リスニングと筆記の点数を比較した場合、本学学生のリスニングの平均点が非常に低いということである。また、筆記部分にしても、全国平均を越えられたのは、第67回の4級のみであり、全体的な力不足を認めざるを得ないだろう。4級以上の受験を希望する学生は、もともと学習意欲の高い者が多い。しかし、結果がでていないのはどうしたわけであろうか。その原因を探るため、次章で「選択中国語」受講者のアンケートの分析をみることによって、中国語中級学習者の学習の現状を探ることとしたい。

(表4) 4級及び3級の平均点

	4級				3級			
	リスニング		筆記		リスニング		筆記	
	宮崎大学	全国	宮崎大学	全国	宮崎大学	全国	宮崎大学	全国
第62回	62.2	70.6	60.6	58.9	50.0	65.4	55.0	67.9
第63回	41.0	54.3	59.1	65.3	(35)	55.2	(40)	60.7
第64回	57.1	64.8	55.4	61.5	46.7	56.9	52.3	56.7
第65回	52.1	67.4	63.4	65.4	58.8	72.7	60.0	62.4
第66回	56.5	72.6	62.6	66.7	47.2	66.8	47.6	57.5
第67回	50.0	65.5	67.8	67.3	50.0	65.1	54.0	61.5

なお、第63回の3級受験者は1名だけであったので、参考値として()内に示した。

3 「選択中国語」での取り組み

これまで述べてきたように、1年生においては、中国語検定の受験は準4級が目標となる。しかし、中国語検定協会が3級を「自力で応用力を養いうる能力の保証」と位置づけているように、3級を取得してはじめて中国語の基礎を身につけたといえ、就職活動のために中国語検定の級を得たいと考えている学生にとって、準4級取得のみでは物足りない。そこで、本学中国語教育の中級学習者向け科目である選択中国語・は、平成20年度から思い切って中国語検定の受験を前提とした講義内容とし、資格を取得したいという学生のニーズに合った形をとっている。ここでは、選択中国語受講学生へのアンケート結果をみることで、その現状と問題点を明らかにしたいと考える。

3.1 平成20年度 アンケートから読み取れる学生の学習現状

3.1.1 前期アンケート結果

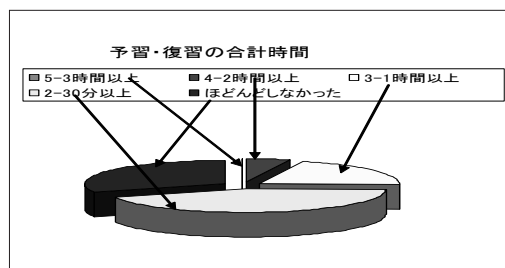
アンケートは、実施によって教員が質の高い講義を遂行することを目的として行った。まず、アンケートデータから浮かび上がってきた学生の現状を分析してみた。

平成20年6月に行われた中国語検定試験後にアンケート調査(7月15日授業内に実施)によると以下のようなことが分かった。

表5から受講学生の予習・復習の合計時間が全体的に極端に少ないことが読み取れる。履修者数39名の中で、予習・復習をほとんどしなかった12名(31%)、20~30分以上17名(44%)、

(表5) 予習・復習の合計時間

時 間	人数(人)	割合(%)
5-3時間以上	0	0
4-2時間以上	2	5
3-1時間以上	8	21
2-30分以上	17	44
ほとんどしなかった	12	31



3～1時間以上8名(21%)、4～2時間以上2名(5%)、5～3時間以上は予習・復習時間なしという結果であった。なんと3割の学生が週1回の授業時のみ中国語を学習しているということになる。

第二学年で「選択中国語」を履修している学生は、第一学年で中国語教員と日本人教員から1年間中国語を学習しており、ほぼ基本的な発音及び文法を習得している。2年目は、その基礎を基にさらなる積み上げを行わなければならない。外国語は毎日の学習時間の蓄積が必要であり、試験期間前だけにいくら時間をかけたとしてもリスニングに関してはなかなか習得できるものではない。また、中国語検定試験の結果からは、筆記試験においては比較的に文法を理解している学生が多い反面、リスニングに関しては全体的に成績が良くない傾向が顕著に見られた。

このことは、学生自身にも自覚があるようである。アンケートの中で1年目で中国語を履修した際授業で学生達が感じたことを書いてもらった。その中でとても興味深い内容ものがあつた。

- ・ピンインをしっかりとマスターする。
- ・リスニング練習し、音を耳に馴染ませる。
- ・リスニング問題を多くする。
- ・リスニングの練習をもっと多く取り入れれば、検定試験も安心して受験できると思う。
- ・1年生から検定試験によく出題される問題をこなしていく。
- ・1年生の時の授業で教科書を暗唱したのはよかった。検定試験に役立つ。

これらの意見は、本学学生の弱点を的確に指摘しているといえるだろう。筆記試験に含まれる声調と漢字とピンインの表記がえに関する問題は、特に本学学生の不得意とするところである。そこからピンインをマスターしなくてはいけないという意見が出てくるのだろう。また、リスニング対策には時間が必要なことも自覚している学生が複数いる。そうであるならば、その自覚を実際の学習活動に結びつける工夫をすることが我々教員の責務ではなからうか。このクラスは、検定受験者がのべ18名しかなく、受講者の半分に満たない。選択中国語の講義目的を完全に理解していない学生が多数受講していたともいえるだろう。

3.1.2 後期アンケート結果

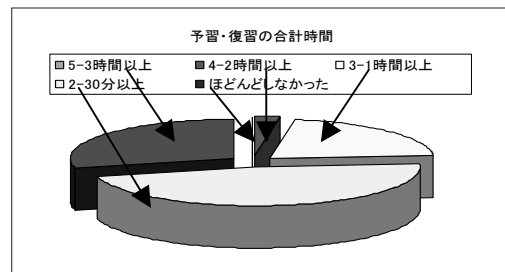
後期アンケートは1月末に実施した。アンケート分析から学生の現状は以下の通りである。前期アンケート及び検定試験の結果を踏まえて少しは学生自身に変化がみられたかと思われたが、学習面において全体的にそれほど大きな変化はなかった。この点に関しては何らかの緊急の対応が求められる。

表6から分かることは以下の通りである。後期受講者数38名のうち、予習と復習をほとんどしなかった者が11名(29%)、2～30分18名(47%)、3～1時間8名(21%)、4～2時間1名(3%)、5～3時間なしという結果であった。前回と同じように全体的に学生の予習・復習の時間が極端に少ないことが図表6からも読み取れる。このクラスも、前期の選択中国語と同様に検定受験者はのべ12名しかいなかった。検定試験への意識の低さもこのような結果の原因であろう。

後期アンケートでも学生の授業に対する考えを書いてもらった。後期アンケートでは中国検定試験を2回受験している生徒もあり、それに基づいて第一学年でどのような授業法が理想なのか聞いてみた。その結果は次の通りである。

(表6) 予習・復習の合計時間

時 間	人数(人)	割合(%)
5-3 時間以上	0	0
4-2 時間以上	1	3
3-1 時間以上	8	21
2-30 分以上	18	47
ほとんどしなかった	11	29



- ・ もっと問題を解く時間がほしい。
- ・ 検定試験合格を目標とするならば、授業で基本的な内容を覚えるほかに検定試験に出題頻度の高い単語などを一緒に学習すると良い。
- ・ 子音の発音はしつこいぐらい発音させた方が良い。ここがあやふやだと後々ややこしくなると感じた。
- ・ 1年生の時から検定試験の内容をした方が良いと思う。そうしないと検定を受けるレベルまで時間が足りない。

これらの意見を受けて、我々は1年生の中国語の授業内容を再検討することにした。特に語彙力の不足については、平成21年度から、1年生全員が単語帳を携帯し、授業中に小テストをしながら単語を覚えていくことになった。また、教科書をさらに平易なものとし、各教員がもっと時間をかけて発音やピンインの習得に焦点を当てた講義内容にできるように変更した。それらの効果が確認できるのは来年度ということになるので、追跡調査をしたい。

以上のアンケート結果から次のようなことがいえる。本学の中級中国語履修学生に顕著に見られる傾向としては、全般的に予習・復習の習慣が身につけていないというものがある。実際には、学習意欲はないが単位は欲しい学生と学習意欲があり熱心に学ぼうとする学生があり、学習雰囲気の違いが生じている。また、授業の進め方においては、教員と学生相互方向授業(学生参加型の授業)の進め方などにおいて工夫する余地があり、いかに学生の学習モチベーションを持続させるかが今後の大きな課題である。

3.2 検定結果とアンケート結果の関連性

「選択中国語」受講学生の中国語検定試験受験の状況と結果は以下の通りである。第66回は4級受験者9名、3級受験者9名で、4級合格者5名、3級合格者1名である。第67回は4級受験者6名、3級受験者6名であったが、試験結果は4級合格者1名のみという結果に終わっている。この状況を試験結果データから分析してみると幾つかの問題点が浮かび上がってきた。

4級においては、リスニング及び筆記で合格基準点の60点以上、3級においては、合格基準点が65点以上となっている。本学学生の状況としては表4から読み取れるようにリスニングの平均点が非常に低いことが顕著に現れている。また、筆記においても声調とピンインに関する問題と日文中訳で点数が伸び悩んでいるようである。これは、声調とピンインが正確に身につけていないこと、語彙力の不足が原因だと思われる。

アンケート結果からも読み取れるように、学生自身「リスニング問題を多くする」、「ピンインをしっかりマスターする」ことなどの自己問題点を理解しているが、実際、予習・復習の習

慣が身につけられていないのが現状である。

3.3 平成21年度前期「選択中国語Ⅰ」における具体的な取り組み

3.3.1 アンケート結果をふまえた取り組み

平成20年度の選択中国語Ⅰの受講学生に対するアンケート及び中国語検定試験の結果を参考にし、学習面において以下のことを試みた。

- (1) 毎回小テストを行う。これは、学生に学習をする習慣を身に付けるためで、授業中習った単語及び検定試験用の単語による声調の組み合わせ問題が範囲である。
- (2) 検定試験によく出される慣用句の暗記。まず、覚えることが中国語をマスターする近道であり、反復練習あるのみである。
- (3) テキストの出題頻度の高い言い回しの暗唱。
- (4) 模試試験用のドリル活用。これに関しては時間が足らず思うように進まなかった。これらの試みの効果の検証については、平成21年6月の検定試験の結果を待ちたい。

3.3.2 現状打開のための解決策

授業で「知識」として理解した学習事項を「技能」として運用できるようにするためには、教室だけでの口頭練習だけでは限界があるので、自宅学習（宿題）にも時間を費やすようにしていき、学生に最低でも復習する習慣を身につけさせるが重要である。

また、「学生が授業内容をどれだけ理解しているのか?」「教師の説明不足な点はなかったか?」など学生主導型の講義内容にしていき、学生のモチベーションを高めていく工夫をする必要性があるように思える。

3.3.3 授業への環境作り

学生の学習意欲を高めるためには、以下のことを行うべきだと考える。

- (1) 受講生にはできるだけ前の席から座ってもらう。後ろの列は空けてもらう。
- (2) ビデオ、CD、DVDなどの活用。ただこれらの道具を使用し見せるだけでは何も語学力アップには繋がらない。一つのきっかけにしかない。
- (3) 私語、携帯、遅刻には厳しい態度で接していく。

3.3.4 授業の内容・方法

- (1) レスポンスシートへのコメントや回答、授業中に質問して学生に答えてもらう。
- (2) ノートの取らせ方、意見の引き出し方、学生へのゆさぶりをかける働きなど授業にある程度変化をおく授業法の確立に努める。
- (3) ヒアリングが苦手の学生には第一学年で使用したテキストの本文などを再活用し暗唱してもらう。

3.3.5 授業外での学習法

- (1) 中国人留学生とのコミュニケーションをする場があるので、積極的に参加するように指導する。
- (2) インターネットを利用した中国語学習法の紹介などを学生に紹介する。

- (3) 中国語ソフト学習の使用法及び活用法を紹介する。
- (4) 中国の大学と交流協定を結んでいるので、短期留学や長期留学などを活用するように勧める。(異文化交流体験学習など)

3.4 中級中国語から本学初級中国語教育に対する提言

宮崎大学の学生の中級中国語学習者に対する様々な取り組みを通して、本学1年次における中国語教育には、次のような工夫が必要ではないかと考え、ここに提言したい。

まずは、教員側がパワーポイントを主体にした授業の進め方、OHCを黒板代わりに使うなど教育機器、視聴覚機器の利用、学生の授業参加促進・動機付け・集中力維持など学生があきらないような授業法を確立することである。さらに、授業の理解度を確認するためにレスポンスシート(感想文)作成や復習テスト(理解度確認テスト)など行い、学生がしっかり授業内容を理解しているかにも注意をはらわなければならない。

最後に最も大切なことは、学生が語学に対して「自信」を持つように教師もバックアップしていくことである。言葉が通じた時の幸せを是非生徒達にも感じてとって欲しい。

3.5 学生の要望

さらに、これらのアンケートを通して、中国語授業に関して以下のような意見をきくことができたので、最後に紹介しておきたい。

- ・ 会話練習をもっと増やしてほしい。
- ・ 検定試験を目標にする必要はなく、異文化体験学習などもあるので、コミュニケーション能力も身につけた方が良いと思う。
- ・ ビデオを使っの授業をしたほうが分かりやすい。
- ・ 実際の会話練習も増やしてほしい。
- ・ 授業でゲームなども取り入れてほしい。

これらの意見については、我々の学生への説明不足を感じる。学生の中には、中級中国語では、検定試験合格を目標とするより中国人教員によるコミュニケーション力向上を目標とする授業をしてほしいとの要望がある。しかし、本学の中国語中級科目は現在選択中国語のみであり、検定合格とコミュニケーション能力向上の両方を到達目標とすることは難しい。コミュニケーション能力を向上させたいといっても、学生自身がいったいその中国語を何時どこで使うのかという明確な目標設定も難しい。1週間に1度しかない授業である以上、やはり明確な目標があり結果が出る検定合格を中級中国語の目標とするのが良いというのが我々の結論である。学生との思惑の違いからか、平成21年度前期の選択中国語の受講者が大幅に減った。20年度の終了時に、ある1年生が中国語教員に、中級に進むなら中国人教員の授業がよい、日本人教員の中級授業に出て意味がない、などという意見を述べていたという。繰り返しになるが、検定合格とコミュニケーション能力の向上の双方を満足させるためには、中級授業の時間数が増えなくてはならない上、非常勤教員の増員も必要となる。それは、現在の大学教育を取り巻く様々な困難の中では実現がきわめて難しい。選択中国語の受講者の大幅減は、実際に前年度受講者の半分ほどしか中国語検定を受験しなかったことに鑑みれば、本当に受講を必要とする学生のみが登録したと考えることもできるだろう。いずれにしても、学生のほとんどがコミュニケーション能力の向上を望み、検定試験合格を目標としないのであるならば我々

の方向転換が必要となるだろう。このことは中国語講座全体の今後の課題としたい。

4 平成20年11月の中国語検定時実施のアンケート

このアンケートは、平成20年11月23日の検定試験実施直後に、受験参加者に協力を求め回答を得た。このアンケートは、「選択中国語」のアンケートの結果、学生の学習時間が非常に少なかったため、検定受験者全員を対象とした調査の必要性を感じ実施したものである。なお、アンケートの総回答数は82で、回答者の受験級の内訳は、準4級59名、4級14名、3級9名である。また、アンケート全文を本論文末に資料として添付した。

4.1 リスニング補習について

前章で取り上げた「選択中国語」は、授業そのものが中国語検定受験を前提としている。しかし、初修外国語中国語を受講している1年生には、授業時間内に検定受験のためのアドバイスをする時間を特別に用意できないのが現状である。そこで、平成20年度後期に、中国語講座として二つの試みを行った。

一つは、月曜日、火曜日、木曜日の昼休みに、中国人留学生との会話練習の時間を設定し、学生がその会話練習に参加した場合は、一回の参加につき成績に1点を加算するというものである。もう一つは、初修外国語の授業が行われる火曜日と木曜日の昼休みに、教室を一つ確保し、中国人留学生によるリスニング力の強化を目的とした補習を行うというものであった。中国語検定には特に後者が関係するので、ここでは後者についてのみ述べたい。

リスニング補習は、初修外国語中国語全クラス及び選択中国語の授業中に告知し、何度も参加を呼びかけた。さらに学生が参加しやすいように、時間途中からの参加でも構わないこと、また途中で退出してもよいことを伝えてあった。火曜日は準4級向けに主に単語の聞き取りを、木曜日は4級受験者にも参加できるよう、文章や会話文の聞き取りをすることにした。授業は、12時15分から30分間行われ、出入り自由、プリントで問題が配られ、まず音声流れる。次に答え合わせをするが、その際留学生が発音を繰り返し聞かせる、というものであった。

この補習を学生がどう活用したのか、平成20年11月の検定後のアンケートを通じて検証したい。

補習に参加したかどうかについて尋ねたところ、「参加した」と答えた者は18名(22.2%)、「参加しなかった」と答えた者は63名(76.8%)であった(無効回答1)。参加した学生のうち、準4級受験者14名、4級受験者2名、3級受験者2名であった。

次に、参加した学生の出席した曜日について尋ねたところ、火曜日のみが5名、木曜日のみが12名、火曜日木曜日共に参加していたと答えた者が1名あった。

全参加回数を尋ねたところ、参加数1～3回が12名、4～6回が5名、7回以上が1名だった。

参加して役に立ったかどうかについては、16名が「役に立ったと思う」と答「あまり役に立たなかったと思う」と答えた者は2名であった。また、補習の感想を求めたところ、

- ・リスニング以外もやってほしい
- ・留学生と先生とでリスニングは教えて欲しい
- ・今後もして欲しい
- ・留学生の方が丁寧で熱心に教えてくれた。もっと今までに利用したかった

・ 分かりやすい回答例とかあってよかった
というようなものがあり、おおむね好意的であった。

一方、補習に参加しなかった学生にその理由を尋ねてみた。すると、「自分には必要がないと思った」という学生が3名、「補習があることは知らなかった」と答えた者は3名であり、「補習があることは知っていたが昼休みは都合が悪かった」という者が最も多く58名であった。我々としては、昼休みが一番参加し易いであろうと考えた末の時間設定であったが、実際には学生の生活パターンに全く合っていなかったことが分かった。したがって、今後このような補習を実施する際は、学生の生活パターンに合うような時間設定が必須の条件となるだろう。

4.2 検定に向けた学習時間について

3章の「選択中国語」内で行われたアンケート調査でも指摘されていた学習時間の不足について、検定準備のための学習時間がどのようなものであるのかを調査したいと考え、平成20年11月の検定受験者に尋ねた結果が以下の通りである。

学習時間が1時間未満の者が、44名と最も多く、次に2～4時間と答えた者が29名、5～7時間と答えた者が6名、25時間と答えた者が1名あった。これは、「選択中国語」での結果と同じで、学生の家庭での学習時間は極端に少ない。さらに級別内訳をみてみたい。

準4級受験者のうち、学習時間が1時間未満と答えた者は32名、2～4時間と答えた者が21名、5～7時間と答えた者が4名、25時間と答えた者は1名であった。一方、4級受験者のうち、学習時間が1時間未満と答えた者は5名、2～4時間と答えた者が5名、5～7時間と答えた者が2名、であった。また、3級受験者のうち、学習時間が1時間未満と答えた者は6名、2～4時間と答えた者が3名であった。

この結果で最も問題なのは、4級以上の受験者の学習時間の短さである。学習時間をほとんど取らずに受験している。これでは、合格率の上昇も望めない。準4級受験の1年生については、授業が週2回あること、教員が検定を意識した練習を授業中に行っていることなど、自ら時間を割かなくとも検定に向けての学習時間が取れることもあり、学習時間が短いと思われる。

4.3 中国語検定の受験動機

平成20年11月の中国語検定の受験者に、その受験動機を聞いた。なおアンケートは、複数回答を可とした。

その結果、最も多かったのは「授業の成績評価の際に、加点があるときいたので」と答えた48名であり、次に多かったのは、「自分の今の中国力を試してみようと思っているので」と答えた36名であった。また、「将来中国語の資格を活かして就職活動をしようと考えているので」と答えた者も27名いた。

推測通り単位取得を目的とした加点目当ての受験者が最も多かったが、それだけでなく、実力を試してみたいというものも多いことに注目すべきであろう。これは、中国語検定が中国語の学習意欲向上に役立っていることの1つの現れでは無かるうか。これは、学生の中には向学心を持つ者が少なからずいることを示唆しており、この点を重視して今後の中国語授業内容の改善をするべきだろう。

4.4 学習の困難点

次に、学生が学習の際に難しいと感じた点を尋ねた。彼らの自学自習の問題点を探るためである。

学生が受験の準備段階で難しいと感じたものを選択してもらった結果、リスニング45名、文法関係14名、ピンインを選ぶ問題36名、長文読解5名、作文など記述する問題28名という回答であった。

中国語検定の受験を終えて、難しいと感じたところを尋ねたところ、最も多かったのは、リスニングの41名、作文など記述する問題34名、ピンインを選ぶ問題28名、文法関係19名、長文読解7名、であった。

やはり、学生自身が検定合格に必要なリスニング力の養成をするのは極めて困難であることが明らかになっている。また、ピンインに関する問題への対応に苦しんでいる者、作文や簡体字を書く問題への苦手感を持つ者が多いことから、1年時の指導の中で十分な語彙力を養成しなかったことが大いに影響していることが読み取れる。

おわりに

以上のことから、本学の中国語教育には以下のような課題があるといえるだろう。

まず、1年生対象の初修外国語の中で、1つの単語の音、ピンイン、簡体字を総合的に身につけさせることの必要性がある。学生は、漢字の字面を追って「なんとなく」中国語を理解しているに過ぎない。また、一部学生が望んでいるような、本当のコミュニケーション能力の養成までにはまだまだ課題が多く、本学中国語教育はまず、学生の学習姿勢の構築を授業時間の中で行う必要がある。昨年度から始めた、週2回の授業に連動性を持たせるという授業方針をどのようにいかせるのか、さらなる研究が必要となるだろう。

そして、学生は自ら学習計画を立て実行する力が乏しいため、中国語履修者に中国語検定合格を目標として示す以上、教員側から学生に検定試験合格に向けた学習計画のモデルを示す必要が有る。そのために今後補習を行う場合、彼らの実力とニーズに合う形で時間や形態を設定しなくてはならない。また、特に1年生の授業の中での検定の位置づけをはっきりとし、授業の内容に取り込む工夫が必要だろう。

最後に、中級中国語のあり方の再検討をする必要があるだろう。現状のまま、中国語検定合格を目標にした講義内容を維持することの是非を検討し、維持するならば、学習モデルの提示を中級でもおこなわなくてはならない。

本学学生にとって、中国語検定は1年生にとっては中国語学習のモチベーションを保つために、また2年生以降には資格取得という実益のために必要だといえる。しかし、中国語の授業は資格取得だけが目的ではないというのもまた事実である。したがって、本学中国語教育に携わる教員達にとってはこれらの分析結果を受けて、さらに本学学生に合った教授法を模索していくことが必要であろう。特に、学生が自主的に中国語学習に取り組み、それぞれの必要とする語学力を身につけられるような工夫をすることが急務である。

中国語を専門としない学生達に対する中国語教育がどこを目指していくべきか、我々には大きな課題がつけつけられている。学生が中国語を選択した理由もそれぞれ異なっており、我々がそれらの要求に完全に応えることも難しい。とはいえ、外国語を学びその言語を使う人たち

との交流を通して得られる喜びは、外国語を学ぶ学生達にとって時代や地域を問わず普遍的なものである。中国語検定は、学生に示すことのできる1つの指標であり、これを上手に活用することによって、我々は彼らに学習モデルを示すことができる。今後も基本的にはこの方針を続けると共に、本学学生の能力とクラスサイズに最も適した教授法及び教材の工夫を続けていくことが必要だろう。これについては、今後の課題とし、別の機会に発表をすることとしたい。

付記

本稿の作成に際して、本学の中国語開講以来の中国語教員である藤井久美子准教授にお力添えいただいた。特に本学中国語教育の変遷の部分については、事実誤認の無いように事前に目を通していただきご助言をいただいた。おかげで、より正確な記述ができたと考えている。深く感謝申し上げる。また、中国語検定後のアンケートの集計は、平成20年度本学教育文化学部地域文化課程卒業生原田淳子さんの協力を得た。ここに記して感謝したい。(上原徳子)

(2009年4月30日受理)

- i 宮崎大学教育文化学部講師
- ii 宮崎大学非常勤講師
- iii 平成21年度『キャンパスガイド』より
- iv なお、この異文化交流体験学習は、平成18年度にも、両校の交流協定締結後の9月に実施され、11名の参加者を得た。ただし、このときは学生が自己負担したのは交通費のみであり、19年度以降、学生が交通費・学費・食費全てを自己負担して参加しているのとは異なる形態で実施された。
- v ただし、教育文化学部人間社会課程言語文化コースの学生は、カリキュラム上の理由から、ドイツ語かフランス語のどちらかを選択することになっている。
- vi ただし、一時期日本人教員が在外研修で半期不在だったことがあり、その時だけ中国人教員だけで週2回の授業を行った。また、若干名、日本人教員のみ、または中国人教員のための科目の単位を取得した学生もある。しかし、これは極めて特殊な事例であり、基本的に学生には、日本人教員、中国人教員の科目をそれぞれ1つずつ履修するように指導している。
- vii 委託会場規則より (http://www.chuken.gr.jp/pdf/meeting_place_1.pdf 最終閲覧日：2009年4月30日)
- viii 中国語検定協会HP参照。本論文中の中国語検定についての記述もすべて協会HPに基づく。
(<http://www.chuken.gr.jp> 最終閲覧日：2009年4月30日)

[資料]

2008年11月 中国語検定に関するアンケート

今後の宮崎大学で行われる中国語検定をよりよくするために、皆さんの意見を聞かせてください。

1. あなたの受験級を教えてください。該当する番号に をつけてください。

準4級 4級 3級 2級 準1級 1級

2. 現在宮崎大学で中国語の授業を受講していますか。該当する番号に をつけてください。
(複数有る場合は全てに をつけてください。)

初修外国語 中国語 (1年生向けの中国語)

選択中国語

中国語コミュニケーション

中国語の授業は受けていない。

3. 今回の検定に向けて、火曜日と木曜日の昼休みにリスニングの補習を行いました。この補習について質問します。

A. 補習に参加しましたか? 参加した 参加しなかった

B. Aで 参加したと答えた人だけに質問します。出席した曜日と、参加した回数について教えてください。

参加したのは・・・

火曜日だけ 木曜日だけ 火曜日も木曜日も参加した

参加回数は (全ての合計回数です)

1～3回 4～6回 7回以上

参加してみてどうでしたか?

役に立ったと思う あまり役に立たなかったと思う 役に立たないと思う

何か意見や感想があれば自由に書いてください。

[]

C. Aで 参加しなかったと答えた人だけに質問します。参加しなかった理由は何ですか?

補習があることは知らなかった

補習があることは知っていたが昼休みは都合が悪かった

補習があることは知っていたが自分には必要がないと思った

4. 中国語検定の受験のため、今回どれくらい学習時間をとりましたか? 一週間あたりの、授業時間以外の学習時間を教えてください。

1時間未満

2～4時間

5～7時間

8時間以上 (具体的に_____時間)

5. あなたが中国語検定を受験した理由を教えてください。(複数有る場合は全てに をつけてください。)

現在受講している授業の成績評価の際に、加点があるときいたので。

将来中国語の資格を活かして就職活動をしようと考えているので。

自分の今の中国力を試してみようと思っているので。

その他(具体的に) []

6. 中国語検定の受験勉強をするとき、何が難しいと思いましたか。(複数有る場合は全てに をつけてください。)

リスニング 文法関係 ピンインを選ぶ問題 長文読解

作文など記述する問題

その他(具体的に) []

7. 実際に今中国語検定を終えて何が難しかったですか。(複数有る場合は全てに をつけてください。)

リスニング 文法関係 ピンインを選ぶ問題 長文読解

作文など記述する問題

その他(具体的に) []

8. 最後に、中国語検定の宣伝、受付、受験など一連の手続きや、中国語講座で用意した補習、授業中に行った検定対策など、中国語検定全般について、感想や意見があれば聞かせてください。今後の参考にさせていただきます。

[]

ご協力ありがとうございました。